

# ボランティアの活躍 集まり、支える

## 第7章

東日本大震災では、多くのボランティアが大槌町を訪れ、支援の手を差し伸べた。

その一方で、ボランティアに来た人とそれを受け入れる側とのギャップで、葛藤も生まれたという。ここに記すことで、災害ボランティア活動の今後に役立てる。



震災直後の町はボランティアを受け入れる体制を整えるのも苦労があり、町外からの応援が不可欠だった。写真は町社会福祉協議会職員と応援に駆け付けた町外社協職員（2011年3月25日撮影）



2011年11月のボランティアセンター。ボランティアの窓口の役割を果たした

## 社協がつなぎ役に

東日本大震災で甚大な被害を受けた大槌町の復旧・復興は、全国各地から駆け付けたボランティアたちによって大きく後押しされた。

町を支援しようと遠くから足を運んだ人々の力を効果的に生かすためには、ボランティア活動者と町民との「つなぎ役」の存在が必要になる。その役割を担ったのは大槌町社会福祉協議会(町社協)が運営した災害ボランティアセンター(災害ボラセン)である。

町社協は、福祉や介護、地域福祉活動などを通して、町民が安心して暮らすことができるようにサポートする民間の福祉団体。平時からボランティアの支援サポートを行っているが、震災後にはボランティアセンターを運営し、町民のニーズの集約とボランティアたちの窓口業務を行った。事前に用意された災害対応マニュアルなどはなかったが、臨機応変に対応していった。

## ボラセンの立ち上げ

発災直後の町社協職員が最優先で行ったのは、運営している介護福祉施設の利用者の避難対応。自力で生活することが困難な利用者の安全を確保することに心を砕き、数日間、利用者と共に避難所の事務所は津波で流失し、多数の幹部職員が犠牲になったため、活動の拠点探しと運営組織づくりが急務だった。

3月19日、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)から、町社協に2人の職員が派遣されたことをきっかけに、ボランティア活動者の受け入れ態勢づくりが始まった。当時町社協の総務課主事だった川端伸哉さん(38)は、「災害ボラセンを立ち上げる必要があることは分かっていた。しかし、具体的な立ち上げ方法が明確ではなかった。そんな時に、支援Pの職員が来て、私たちに助けてくれました」と話す。

支援Pの職員は町社協職員に対して、組織の仕組みや支援の内容について細かく説明した。その後、町内の状況を把握するために2日間の視察を行った。町社協職員と支援P職員、駆け付けた東海ブロックの社協職員らと話し合い、拠点となる災害ボラセンを設置する必要があると判断。町社協を今後、どのように立て直し、拠点を立ち上げていくかについて協議を始めた。

支援Pや東海ブロック(岐阜県三

重県・名古屋市長野県)の社協職員、岩手県社協の助力で3月25日、町中央公民館に災害ボラセンを立ち上げた。ガソリンや携帯電話、筆記用具など、必要最低限の資機材を用意し、27日に拠点となるテントを城山公園体育館前に設置。29日から本格的にボランティアの受け入れを開始した。

川端さんは、支援Pの職員らの柔軟な対応が印象的だったという。「支援Pの職員は、私たちに指示を

## 災害ボランティア活動支援プロジェクト会議

略称「支援P」。企業・社会福祉協議会・NPO共同募金会が協同するネットワーク組織。災害ボランティア活動の環境整備をめざし、人材、資源、物資、資金を有効に活用するため、現地支援を行う。2004(平成16)年に発生した新潟県中越地震をきっかけに発足した。



町内の被災状況を確認しながら活動した

## 4カ所に中継拠点

災害ボラセンの本格始動と同時に町中央公民館にボラセン本部を設置し、その後、4月10日に大槌保育所跡地へ社協事務所(仮設)と共に移転した。しかし、いずれも実際にボランティア活動をする地域と本部の距離が離れてしまい、活動に支障が出るのが懸念された。さらに、ボランティア志望者が多く、一つの窓口で受け入れるには限界があった。

そこで町社協は、適切な地域にサテライト(中継拠点)を4カ所設置することで、それらの問題を解消しようと試みた。ボランティアの受け入れが本格化した3月29日、サテライトをさらに大ケ口地区と桜木町に、その後、町の被災状況を踏まえ、



3月29日に設置された桜木町のサテライト



4月10日に移転したボラセン本部

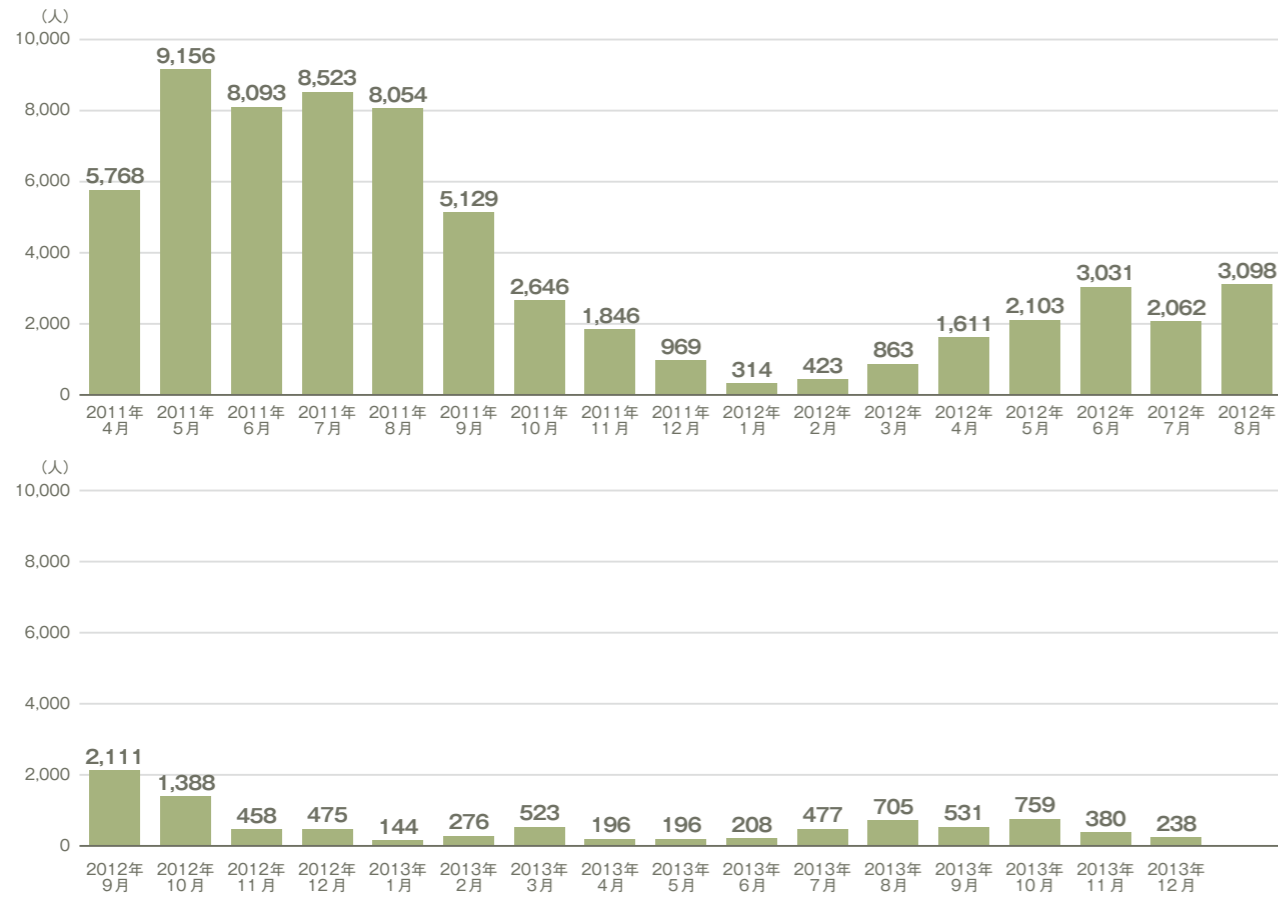
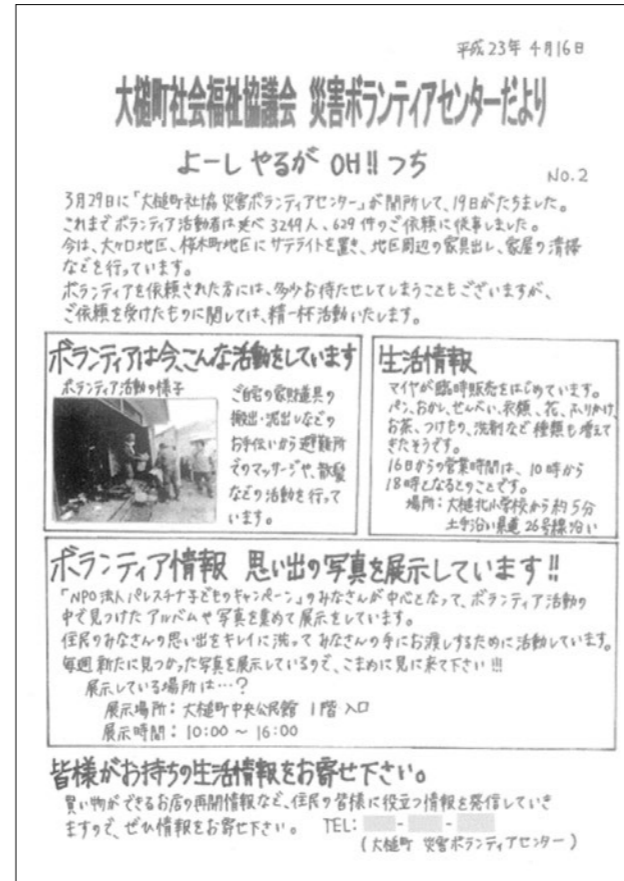


図7-1 ボランティア参加活動人数 「大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」から

## ボランティアセンター運営の経過

| 2011 (平成23)年 |                                                                            |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------|
| 3月19日        | 災害支援ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援P)から、大槌町社協に2人派遣される<br>今後の大槌町社協の立て直しについて協議をする      |
| 3月25日        | 「災害ボランティアセンター」立ち上げ<br>災害支援ボランティア活動支援プロジェクト会議、岩手県社協職員、東海ブロック社協職員の助力で立ち上げた   |
| 3月27日        | 「災害ボランティアセンター」活動開始<br>城山公園体育館入り口前にテントを設置した                                 |
| 3月29日        | 「災害ボランティアセンター」活動本格化<br>本部機能を中央公民館へ集約。サテライトを大ケ口地区、桜木町へ設置し、全国からのボランティアを受け入れる |
| 4月10日        | 本部を大槌保育所跡地へ移転                                                              |
| 4月13日        | 広報誌の発行を開始<br>災害ボランティアセンターだより「よーしやるがOH!!つち」を発行し、ボランティアの情報を伝える役割を果たした        |
| 4月中旬         | 生活支援班の立ち上げ<br>社協職員による避難所のニーズの把握、在宅の見守り活動などを行う                              |
| 4月21日        | 沢山地区にサテライトを設置                                                              |
| 5月3日         | 吉里吉里地区にサテライトを設置                                                            |
| 7月下旬         | サテライトを1カ所に統合<br>大槌保育所跡地に集約した                                               |
| 8月下旬         | サテライトを移動<br>パチンコ店「バーラーR45」に移動した                                            |
| 9月1日         | 「復興支援ボランティアセンター」と名称を変更                                                     |
| 2012 (平成24)年 |                                                                            |
| 4月1日         | 「大槌町社協ボランティアセンター」と名称を変更                                                    |



大槌町社協発行の災害ボランティアセンターだより「よーしやるがOH!!つちNo.2(4月16日発行)」



マッチングや活動指示のため、ボラセン本部に人が集中した

沢山地区と吉里吉里地区にも設置した。  
これにより、町民のニーズを地区ごとに把握し、ボランティア活動者の受け入れを分担することができた。  
**情報紙で活動周知**  
ボランティアセンターを立ち上げると、町外から多くのボランティアが集まってきた。次は、町民にボランティアを要請できることを知って

もらう必要があった。そこで、ボランティア活動者の情報や要請方法を手書きでまとめた「よーしやるがOH!!つち」を作成し、4月13日から町民に伝え始めた。町社協職員が対象地区のキーパーソンと一緒に住宅一軒一軒に配り、「要望や困りごとがあれば教えてください」と、災害ボラセンの存在と活動内容を住民に周知。ニーズを吸い上げ、支援者とのマッチングを図った。

### 町と社協の連携必須

当時、災害ボラセンの担当を任された渡辺賢也さん(31)は、町役場と町社協の連携について「うまくいったと思います。『ボランティアのことは社協に』と町がきちんと位置付けをしてくれたし、震災後の情報共有の場にも毎日参加したので、町とのつながりを大事にできました」と話す。  
川端さんも次のように語り、役場との協力関係を重視する。



ボラセン本部は避難所のニーズを集約する役割も担った。避難所ごとのニーズを手書きで壁に張り出し、対応に尽力した

「例えば、ボランティアで建物内の泥かきをするとき、使えなくなった家財道具を外に出します。それらを町に『片付けてくれませんか』と頼むと、次の週には行政の力で片付いていくんです。これは、震災前から町と社協がつながりを持ってきたから。縄張り争いをするのではなく、町民の皆さんが暮らしやすい町をつくるという考えがお互いにある。日ごろから顔の見える関係づくりが必要だと感じます」



床下にたまった泥をかき出すボランティアら（沢山地区）

半年間は住宅清掃

発災から2週間後、大槌町社会福祉協議会の態勢が整い、「災害ボランティアセンター」という名称で支援者の受け入れを開始した。川端伸哉さんは「初期は泥出し。センターの立ち上げから半年くらいは、桜木地区や大ケ口地区、吉里吉里地区や沢山地区といった、ボランティアが作業しても危険が少ない物件が多い地区の泥出しが主な活動内容でした」と言う。

多様な支援と、葛藤

住宅の清掃をはじめとした町の復旧を支援する活動のほかにも、避難所運営の援助や、町内外の人々が協力して大槌町の魅力を取り戻す活動、被災した町民を精神的に支える活動など、さまざまな支援が行われた。

これらの活動には、町外の支援者と町民が共に行った活動もあった。

その一例が、「NPO法人グッドネーバーズ・ジャパン」の協力を得て行った「鮭プロジェクト」。鮭が遡上できるきれいな川をよみがえらせるために、大槌川、源水川、小鏡川の清掃作業を行った。ほかにも、源水川に生息するイトヨを守るために河川清掃を行った「イトヨプロジェクト」、町民が協力して町に花を植える活動「花いっぱいプロジェクト」や「菜の花プロジェクト」、仮設住宅入居者のコミュニケーション形成や引きこもりの防止、孤独死を防ぐ目的で行われた「お茶っこ隊」など、町内外の人が参加し活動を繰り広げた。



泥かき作業に必要な資材を、旧大槌中学校で管理した

「受け入れの態勢が整っているのか、素人が立ち入ってもいいレベルなのか。現場の状況を理解した上で来てほしい」と渡辺さん。川端さんはその点について、「資材もないし、ガソリンもない。泊まる所もない。そんな中で来て、受け入れる側は混乱すると思います。助けたという気持ちはありませんが、態勢が整ってからは望ましいです」と話す。

支援は態勢整ってから

町社協は初期の問題として、受け入れ態勢が整う前に来町する支援者がいたことを挙げている。

町民の気持ちを配慮

受け入れ態勢が整い支援が可能になっても、町民によるボランティアの依頼は予想外に少なかった。そうした状況を変えようと、町社協職員らは、各地区の自治会長と共に、各住宅へ向いてボランティアの利用を案内する情報紙「よしやるがOH!!」を配布。当時「ボランティア」という言葉になじみのない住民も、自分が知っている人が間に入り説明することで、安心して依頼できるようになることが分かった。

「受け入れの態勢が整っているのか、素人が立ち入ってもいいレベルなのか。現場の状況を理解した上で来てほしい」と渡辺さん。川端さんはその点について、「資材もないし、ガソリンもない。泊まる所もない。そんな中で来て、受け入れる側は混乱すると思います。助けたという気持ちはありませんが、態勢が整ってからは望ましいです」と話す。

表7-1 ボランティア受け入れ団体・人数(2011年4~8月)

| 月     | 団体  | 人数    | 泥出し(がれき) | 炊き出し  | 花いっぱい | 鮭P(イトヨ) | 菜の花P  | 写真整理 | 掃除 | 引っ越し | イベント | お茶っこ | 海岸清掃 | 草刈り | その他 |
|-------|-----|-------|----------|-------|-------|---------|-------|------|----|------|------|------|------|-----|-----|
| 2011年 | 4月  | 332   | 5,768    | 5,244 | 276   | 0       | 0     | 71   | 3  | 0    | 33   | 0    | 0    | 0   | 141 |
| 5月    | 716 | 9,156 | 8,115    | 541   | 0     | 0       | 0     | 151  | 23 | 0    | 121  | 0    | 0    | 7   | 198 |
| 6月    | 587 | 8,093 | 6,825    | 605   | 106   | 0       | 0     | 124  | 17 | 81   | 75   | 0    | 0    | 0   | 260 |
| 7月    | 464 | 8,523 | 5,836    | 227   | 0     | 758     | 140   | 77   | 0  | 388  | 876  | 0    | 0    | 0   | 221 |
| 8月    | 428 | 8,054 | 3,983    | 81    | 46    | 593     | 1,895 | 92   | 0  | 85   | 151  | 298  | 0    | 0   | 830 |

「大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」から  
\*「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

Interview

あつという間の清掃で「人の力」を実感

大槌保育園 園長 八木澤 弓美子さん

被災した園舎は泥だらけでした。泥を掃除しようにも家具類を移動しなければならなかったため、何日もかけて職員たちが外に出しました。

当時の自分たちは「ボランティアって何？」という状況。ボランティアの話も聞いても、最初は頼まなかったんです。そういう支援を頼むにはお金がかかると思っていましたし、「ボランティアです」と訪れた方を不審者じゃないかと疑っていました。それに、「自分たちの園のこととは自分たちで」という気持ちが強かったので、そもそも人を頼るという考えがなかったんです。

それでも、無償で依頼できることや、ボランティアの皆さんの話を聞いて、依頼を決めました。実際に頼んだら「こういうことだったのか」と。3~4日間に各日50~100人の方が園舎に来てました。すると、「この1カ月、私たちは何をしていたんだろう」と思ってしまうくらい、あつという間にきれいになりました。「人の力ですこいな」と思いましたね。



仮設住宅へ引越す住民の支援も行われた

公共的支援にシフト

発災から約半年がたった9月1日、災害ボランティアセンターは「復興支援ボランティアセンター」に名称を変更し、支援者の受け入れを続けた。この時期からは、避難所から仮設住宅への引越しの支援など、「個人への支援」も引き続き行われたが、道路の側溝や海岸の清掃のような町を整えていく活動が徐々に増加した。

また、仮設住宅への入居がほぼ完了し、新たに地域コミュニティの再生が課題になった。そのため、地域の町民が共に参加して会話やイベントを楽しむ「サロン活動」も主な支援の一つになった。

町民の「慣れ」

この頃になると、あまり本来的でない要望を町社協に持ち込む町民も出てきた。町社協職員や支援者に慣れてきたことや、震災直後の緊

迫した状況から脱却し、町民が身の回りや将来のことを具体的に考えられるようになったことが要因と考えられる。

渡辺賢也さんは「自分たちの生活に即したニーズ、例えば病院の送り迎えや、お墓の掃除など。本来、自分たちでできるはずのことをボランティアに頼みたいという声が増えました」と、町民の態度に変化があったことを語る。

川端伸哉さんは、中期の問題点について次のように指摘する。「ボランティアと個人的につながっている人も出てきて、そういう人たちは社協を通さずボランティアを頼んでいました。平等性がなくなるのは問題ですね。うまくないなと思いましたよ」



仮設住宅入居者のコミュニティ形成や孤独死を防ぐ目的で開始したサロン活動「お茶っぴ隊」



泥がたまった側溝を清掃するボランティアの人々



子どもたちの遊ぶ場所を確保するために開催された「わくわく子供広場」



2011年12月10日に開催された「大槌鮭復興祭」。震災後「鮭プロジェクト」に参加した人々も駆け付けた

表7-2 ボランティア受け入れ団体・人数(2011年9月~2012年3月)

| 月     | 団体  | 人数  | 泥出し(がれき) | 焼き出し  | 花いっぱい | 鮭P(イトヨ) | 菜の花P  | 写真整理 | 掃除  | 引越し | イベント | お茶っぴ | 海岸清掃 | 草刈り | その他 |     |
|-------|-----|-----|----------|-------|-------|---------|-------|------|-----|-----|------|------|------|-----|-----|-----|
| 2011年 | 9月  | 342 | 5,129    | 1,756 | 36    | 0       | 1,290 | 304  | 1   | 18  | 113  | 56   | 635  | 0   | 20  | 900 |
|       | 10月 | 178 | 2,646    | 905   | 6     | 1       | 737   | 0    | 15  | 0   | 0    | 101  | 400  | 0   | 0   | 481 |
|       | 11月 | 144 | 1,846    | 494   | 86    | 0       | 304   | 0    | 6   | 0   | 0    | 63   | 520  | 0   | 0   | 373 |
|       | 12月 | 89  | 969      | 179   | 0     | 0       | 0     | 0    | 189 | 0   | 75   | 0    | 388  | 0   | 0   | 138 |
| 2012年 | 1月  | 98  | 314      | 38    | 0     | 0       | 0     | 0    | 201 | 0   | 9    | 45   | 0    | 0   | 0   | 21  |
|       | 2月  | 148 | 423      | 162   | 5     | 0       | 0     | 0    | 151 | 0   | 0    | 0    | 0    | 0   | 0   | 105 |
|       | 3月  | 163 | 863      | 440   | 40    | 0       | 0     | 0    | 52  | 8   | 6    | 89   | 0    | 0   | 0   | 228 |

「大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」から  
\*「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

Interview

親睦を深めるイベントに  
ありがたい協力

芳賀 廣安さん

小鐘第8仮設自治会 元会長

当時120戸あった小鐘第8仮設で、私は自治会長を務めていました。町内でも大きい仮設団地だったので、4班に分けて自治会の運営に当たっていました。自治会では、団地住民の親睦を深めるために、イベントやサロン活動を行いました。住民の協力もあり、みんなで協力して企画運営しました。その時、町内外のいろいろな団体に助けていただいたおかげで、イベントを企画できました。例えば、「カリタスジャパン大槌ベース」という団体には、物品や食材の支援、当日の運営協力をしていただきました。自治会として物が十分にそろっていないところであり、人員も不足しており、大変ありがとうございました。ボランティア以外にも、自治会の役員に応援職員の方、町役場や岩手県保守管理センターに各種対応していただき、感謝しています。外部からの支援に関して困ったことはないですね。



「花いっぱいプロジェクト」は、町民のボランティア参加を促すとともに大槌町に彩りを添えた

これからは自分たちで

2012(平成24)年4月、町社協が震災前に行っていた受け入れ態勢に戻り、「大槌町社協ボランティアセンター」に名称を変更した。

このころには、多くの支援者を必要とする時期は過ぎ、町民がボランティア活動に参加することで町民同士が支え合う町を目指す段階に入った。

「自分たちの力で町のためにできることを考える場が必要だと感じます。住民さん向けにも『ボランティアってなんだろう?』ということを知ってもらうために、自分たちで助け合えるような勉強会や研修会を企画しています。ボランティアって、そんな難しくないんだよということを知ってもらいたいです」と渡辺賢也さんは話す。

## 町民の意識変えたい

町社協は、震災前からボランティア

ア団体を受け入れる態勢を整えていた。しかし、町民がボランティアを理解しているとは言えなかった。渡辺さんは、大槌町とボランティアの関係について改善すべき点があると考えている。

「町内全体として『ボランティア』という用語自体、知らない人が多かったと思います。今も『ボランティアは、無料で何でもしてくれる人』という認識を持っている人は多いと思うので、意識を変えていくために必要な取り組みを考えています」

## ネットワークを形成

同じ目的を持っているにもかかわらず、複数のボランティア団体が情報共有をせずに活動していることが多く見受けられた。そこで、必要な情報や人手を共有し、互いに助け合いながら効果的な活動ができるようにネットワークを形成した。それが12年7月に町社協が立ち上げた「大槌町NPO・ボランティア

団体連絡協議会」である。町民で構成された16のボランティア団体をまとめて組織化された。

川端伸哉さんは次のように語る。「地元の団体には高齢者が多いので、ゆつくり、細々とやりたいんです。その一方で、町外から来た人は『あれやりたい、これやりたい』と毎日話し合いをするような人たちもいるんです。この町外の団体さんの熱に地元のおじいちゃん、おばあちゃんたちはついていけない。強く押されるような気がなくなってしまうのです」

また、渡辺さんは「いずれ町外の団体は、数も活動も少なくなってしまうので、町民がメインの団体だけで構成しようという話になりました」と話す。

## 助け合い、自発的に

その都度、町の状況に合わせて形を変えてきた大槌町のボランティア。これからのことについて、渡辺さんは

こう話す。

「住民がお互いに助け合っていくようなことを続けていきたいですね。それが町社協の目指す理念につながっていくことになります。こちらがお願いしなくても、自発的に自分たちで必要なことをやっていくような町にしたいです」



「吉里吉里海岸清掃プロジェクト」で吉里吉里地区の砂浜を清掃する人たち。町内外から多くのボランティアが参加した

表7-3 ボランティア受け入れ団体・人数(2012年4月~2013年3月)

| 月     | 団体    | 人数  | 泥出し(がれき) | 焼き出し | 花いっぱい | 鮭P(イトヨ) | 菜の花P | 写真整理 | 掃除  | 引っ越し | イベント | お茶っこ | 海岸清掃 | 草刈り | その他 | 男性向けサロン |    |
|-------|-------|-----|----------|------|-------|---------|------|------|-----|------|------|------|------|-----|-----|---------|----|
| 2012年 | 4月    | 219 | 1,611    | 640  | 0     | 21      | 0    | 53   | 489 | 4    | 57   | 30   | 125  | 0   | 192 |         |    |
|       | 5月    | 497 | 2,103    | 341  | 0     | 83      | 0    | 91   | 244 | 14   | 61   | 73   | 753  | 30  | 355 |         |    |
|       | 6月    | 437 | 3,031    | 789  | 0     | 218     | 0    | 0    | 380 | 4    | 90   | 105  | 650  | 251 | 387 |         |    |
|       | 7月    | 468 | 2,062    | 248  | 0     | 211     | 0    | 105  | 0   | 190  | 10   | 155  | 182  | 547 | 241 | 173     |    |
|       | 8月    | 698 | 3,098    | 361  | 24    | 379     | 0    | 199  | 15  | 90   | 17   | 174  | 139  | 826 | 373 | 501     |    |
|       | 9月    | 450 | 2,111    | 314  | 20    | 230     | 0    | 62   | 0   | 36   | 25   | 97   | 65   | 584 | 344 | 334     |    |
|       | 10月   | 320 | 1,388    | 292  | 0     | 94      | 0    | 101  | 0   | 0    | 6    | 105  | 42   | 291 | 212 | 245     |    |
|       | 11月   | 72  | 458      | 98   | 0     | 47      | 0    | 49   | 0   | 0    | 7    | 53   | 65   | 0   | 23  | 97      |    |
|       | 12月   | 42  | 475      | 15   | 33    | 15      | 0    | 24   | 0   | 74   | 0    | 88   | 173  | 0   | 0   | 36      |    |
|       | 2013年 | 1月  | 24       | 144  | 0     | 0       | 0    | 45   | 0   | 0    | 0    | 16   | 54   | 0   | 0   | 15      | 14 |
|       |       | 2月  | 38       | 276  | 0     | 0       | 0    | 56   | 0   | 0    | 0    | 81   | 68   | 0   | 0   | 45      | 26 |
|       |       | 3月  | 47       | 523  | 0     | 29      | 0    | 80   | 0   | 28   | 15   | 128  | 68   | 0   | 0   | 153     | 22 |

「大槌町社会福祉協議会東日本大震災記録誌「感謝～想いをつなぐ～」から  
\*「花いっぱい」→「花いっぱいプロジェクト」、「鮭P」→「鮭プロジェクト」、「菜の花P」→「菜の花プロジェクト」

## Interview

高齢者が多い地域で  
入居者の交流を

屋敷前アパート自治会 会長  
佐々木 睦子さん

屋敷前アパートは、2016(平成28)年6月に設立された災害公営住宅です。この入居者は、高齢者が多い。部屋に閉じ込めて孤立してしまうことが懸念されるため、なるべく部屋の外に出て入居者と交流してほしいと思い、行事やイベントに力を入れています。主な内容は、健康づくりのイベントや映画鑑賞会、クリスマスや忘年会などの季節行事です。月1回の頻度で民生委員による見回り活動の報告会もしています。

大規模な災害公営住宅であり、運営が難しい面もあることから、他の市町村の災害公営住宅自治会と連携し、取り組みを参考にしています。

震災から年月がたっていますが、今でも支援をしてくださるボランティア団体もあります。それらの団体と常に情報を交換して、交流を図っていくことも重要です。今の大槌町は復興が落ち着いてきて、徐々に普通の生活に戻ってきている段階ですが、その中で住民のことを考えた支援をしてくれる団体、われわれ住民の心に寄り添ってくれる団体と一緒に活動していきたいと思っています。

私が岩手に来てから大きな地震は何回もありましたが、あの震災の恐ろしさは想像もつかなかったです。電気が回復して、テレビで津波の映像を見た瞬間に「これはすごいな……」と。

従業員の家族も被災しているし、何か少しでも手助けできないか。そう思っていたときに、県職員の方から金ケ崎町の工場に「沿岸へ行くのに車を出してほしい」という依頼が入りました。当時の工場長に相談したところ、「車の生産が再開できるまでは、地域のために活動しよう」と決断してくれ、大槌町内の活動に、各職場から選抜した従業員が輪番制で加わりました。

約1カ月後、私たちの工場は少しずつ通常稼働に戻りましたが、それから定期的に大槌に行き、泥出しやがれき撤去、仮設住居の引越しの手伝いなど、いろいろなボランティアをしてきました。当社で

グッドネーバーズ・ジャパンは世界35カ国で支援を行っている団体です。本部はアメリカにあり、日本事務局が設立されたのは2004(平成16)年でしたが、日本での活動は東日本大震災が初めてでした。

私たちは発災の3日後、目的地も決めずに、レンタカーで被災地方面に向かいました。山形で支援物資を調達しながら情報を集めていると、岩手の釜石・大槌で被害が大きいと知り、実際に足を運んでみることにしたんです。特に大槌は役場も被災し、被災者の支援が大きく遅れていた。それから、まずは北上市の短期賃貸マンションを借り、大槌に通うようになりました。がれきの撤去や、砂浜の清掃活動、心のケア、そして漁業再開支援などを行いました。最初は現地に知り合いがいたわけではなく、まったく知らない横文字の団体が入ってきたということで、皆さんに受け入れてもらえるだろうかという不安はありましたね。



忘れられない  
大槌の人との出会い  
ボランティアで学んだ  
地域との関わり方

知らない自分たちを  
受け入れてくれた大槌町  
地元の人たちがつくる  
これからの町に期待



## トヨタ自動車東日本株式会社 岩手工場

工務部 工場管理室 楽山 勲さん 取材協力/工務部 部長 村杉 英記さん

は、KYTという危険予知訓練をし、から作業に入ります。けがをしないための対策など、安全に気を付ける会社だったからこそ、災害現場でもスムーズに作業することができたのかなと思います。

大槌ではたくさんの人との触れ合いがありました。仮設住居で支援物資を配っていた時には、休憩中に避難者のおじいちゃんおばあちゃんが「今日はありがとう！暑いからこれ食べて！」と言って、冷凍したバナナを差し出ししてくれた。あの時のことは本当にうれしくて、一生忘れられません。

この震災を経て、地域に対する企業の関わり方を学びました。あと1年で私は定年を迎えますが、少人数でもいいから今後も支援を続けてほしい。当社が大槌と内陸を結ぶパイプになればいいですね。

## 認定NPO法人グッドネーバーズ・ジャパン

広報部長 飯島 史絵さん(左) 国内事業部長・国内災害対策室長 武鐘 史恵さん(右)

町社会福祉協議会が前面に立つて復興活動を行うようになってからは、ボランティアの受け入れ、事務作業など、皆さんの手が回らない部分を補うようになりました。社協や役場の方々は被災者でもあり、当時は自分たちの生活を続けていくのにも大変な状況。一方で私たちは途上国駐在の経験もあつたので、想定外のことが起こったときの対応には慣れていて、部分もありません。皆さんをサポートすることができ、少しはお役に立てたのかなと思っています。

さまざまな支援を続けていくうちに、私たちの活動を理解し、一緒に活動してくれる人も増えました。ただ、いずれは地元の人たちが主体となって、町を復興させなければならぬと考え、私たちは13(同25)年の9月をもって東北での復興支援活動を終了しました。いつまでも被災地と呼ばれないよう、意見をどんどん言いながら、皆さんで前を向いて、本当の復興を目指してほしいです。

# 建学の精神で復興支援 明治学院大学の活動

## 「他者への貢献」実践 学生ら、町民と交流深く



2018年6月、町文化交流センターおしゃちの開館行事を手伝いに訪れた明治学院大生。右から大根さん、桑山さん、荻野さん、橋田さん、寺西さん、渡辺さん

明治学院大学（本部・東京都港区）は震災直後から、主に吉里吉里地区で積極的にボランティア活動を展開してきた。建学の精神に基づき、被災地の復興支援活動「ドックFor Smile @ 東日本」プロジェクトの一環。活動は緊急期の炊き出しや物資の仕分け作業、今も続く小中学生が対象の学習支援など多岐にわたり、2019（平成31）年3月現在で延べ1380人の学生が現地に足を運んだ。町民たちとの触れ合いから学んだものは何か。現役生6人と卒業生1人に聞いた。

現役生6人は震災当時、小学6年〜中学2年。1人を除いて関東地方に住んでいて、一様に大きな衝

撃を受けた。社会学部2年の荻野満帆さん（19）は「その時から何かしたいという思いがずっとあった」。高校で「ボランティア部」に入り、被災地行きを希望したが、かなわなかった。法学部3年の寺西なつみさん（20）も募金しかできず、「無力感」に囚われた。問題意識の受け皿になったのが、同大のボランティアセンターだった。

### 夏休みに学習支援

学生らは主に、小中一貫教育校の吉里吉里学園での学習支援や地区行事の手伝いをする。荻野さんは18（同30）年8月、同学園小学部で夏休みの宿題を見る「コラボスクール」に参加。児童たちと姓でなく名前呼び合い、笑顔が弾ける。荻野さんは「地域の方々は『来てくれるだけでボランティア』と言ってく

れる。私たちのやっていることは間違いないと確信しました」と成果を強調した。

法学部3年の橋田樹さん（22）は太平洋岸の浜松市で育ち、小学生の頃から東海地震の危機を身近に感じてきた。進学した高校には津波から逃げる安全な避難場所がなかった。「浜松は台風など災害が多い町。僕も東日本大震災の被災地と比較することがよくある」

橋田さんは、経済的な事情などで塾に通えない中学生に勉強を教える東京のNPOでアルバイトをしている。「学習の格差は、原因の違いはあっても社会的な課題。被災地の生の声を遠く離れた東京にも伝えられたら」という。

### 好きだからできる

現役生たちはボランティア経験を

将来にどう生かしたいのか。

法学部2年の渡辺芽依さん（19）は被災者との交流に「ここまで踏み込んだ質問をしてくれるのか、人との距離感を学んでいます。そうした学びを糧に、司法書士を目指す。社会学部2年の大根萌花さん（19）は、震災を経験していない児童との触れ合いから、事実や教訓を次世代に伝える難しさを痛感。町民との語らいを「自分が経験していないことを聞ける大切な機会」と捉える。

文学部2年の桑山紗也香さん（20）は、在籍する英文学科で学んだ英語を武器に「いろんな所でいろんな人と関わりたい」。ボランティアを通して「コミュニケーション力」を培い、ホテルスタッフなど観光関連の業種に就くことを夢見る。

寺西さんは通ったたびに「どんどん吉里吉里が好きになる一方、大学の活動とプライベートな交流との線引きをどこにするか、悩みました。しかし今は「好きだからこそ、実際に足を運んだ自分だからこそでき

ることがある」と悟り、「関東でも震災の風化が進んでいる。ずっと被災地を「考えていくことが大事」。いずれ「地域おこしの団体などで働ければ」といい、「大槌で？」と水を向けると「そうですね」とほほ笑んだ。

### ほれ込んで移住

震災の年にボランティアを体験してこの町にほれ込み、当地で暮らすまでになった卒業生がいる。会社員の生田みずきさん（26）。釜石市が本社の水産加工会社で営業を担当し、三陸産の新鮮な魚介類を無添加で調理した冷凍食品を学校給食用などの販路に乗せる。



大槌への愛情が高じて移住した卒業生の生田みずきさん

震災は、大学入学が決まり、実家のある京都市にいた時に起きた。津波の映像を見ても現実と思えず、「東京より上に行ったこともなかった」。仲良くなった男子学生が宮城県出身で、足しげく被災地に通っていた。影響を受け、同大ボランティアセンターの門をたたき、がれきの隙間に夏草が青々と生い茂る7月、初めて町に下り立ち、支援物資の仕分けを行った。その後は毎月のように吉里吉里を訪れ、森林再生を促すNPO法人「吉里吉里国」で間伐の手伝いなどをした。

### 人と食が魅力

「自分の中で吉里吉里に色が付いた瞬間がある。岸壁でアイナメやドンコ（エゾエイナメ）を釣り、地元の調理法を教わった。「震災だけじゃないんだ。ここに住んでみたい」。卒業後、専門商社で2年働いたが、人と食の魅力にあふれる大槌が忘れられず、今の会社に転職した。「吉

里吉里の人たちが私にしてくれたように、将来住んだ土地で食べ物や食べる知恵を誰かに分かち与える生活ができれば幸せです」

（取材／2018年6、8月）

### 明治学院大の 震災ボランティア

「ヘボン式ローマ字」の考案で知られる、同大創設者で米人医師・宣教師のJ・C・ヘボン（1815〜1911）の教育理念「ドックOpen Arms（他者への貢献）」の意をくみ、1995（平成7）年の阪神淡路大震災を契機にボランティアセンターが設立された。東日本大震災の発生翌月に大槌町や宮城県気仙沼市で活動を開始。翌年3月に大槌町とボランティアの「協働連携協定」を結んだ。津波で大部分が流された、吉里吉里地区の方言を収録する「吉里吉里語辞典」をテキストデータ化し、復刻本の出版を後押しするというユニークな支援も行った。



# Episode file

～ボランティア～

よりよい世の中をどう作るか  
深く考えるきっかけに



震災時に泥出しのボランティアをした場所で

大津波でダメージを受けた町や人を助けようと、全国から多くのボランティアたちが駆け付けた。北九州市門司区で焼き肉店を営む巖洞秀樹さん(44)もその1人だ。震災から2カ月後、吉里吉里地区で側溝の泥出しに従事した経験が「人生を大きく変え」、現在は防災関連のビジネスにも取り組む。

― 震災から間もなく、大槌でボランティアをしたきっかけは。

妻の母親が所属する宗教団体が要員を募集しており、即座に「行きます」と返答しました。僕は港湾土木の現場監督だった経歴があり、教団側はそういう人材を派遣したかったようです。釜石のボランティアセンターで「吉里吉里に行くてください」と言われ、その時は吉里吉里って素敵な名前だなと思いました。

― 大槌に入ったのが5月下旬。焼け野原に焦げた臭いが漂い、言葉

が出ませんでした。自衛隊の車両や全国のパトカー、そしてボランティアのお坊さんたちの姿。それらが最初に目に飛び込んできた光景です。

吉里吉里では、海岸から100メートルぐらいの浸水地域で、幅1メートルほどの側溝にたまった泥を土のうに詰め、脇に積み上げ、水はけを良くする作業をしました。3日間、4人がかりでスコップを振るい、50メートルぐらい掘り進みました。

僕らが作業をしていた辺りに、流された美容室がありました。お店の女性が来て、仕事道具を見つけたら取っておいてほしいと頼まれました。疑似餌がいつは出てきたので、そのことを伝えると「隣がイカ釣り漁師さんです。今は生きているのか、死んだのかも分かりません」と言い、とても印象的でした。

吉里吉里小学校の子どもたちは僕らにあいさつしてくれました。その時に、ボランティアセンターの人から「児童の3割くらいは親を亡くしているが、元気でがんばっている」という話を聞いて、思わず涙が出ました。僕も今、子どもが5人いますので。

― その3日間で学んだことは。

二つあります。それが僕の人生を変えたといっても過言ではない。一つは「世の中、思うようにうまくはいかない」。もう一つは「天災は善人も悪人も区別しない」ということです。そこから、なぜ自分がこの世に生まれてきたのか、子どもたちのために、どうやったら良い世の中を作っていけるのかということに深く考えるようになりました。自己完結するのはもつやめよつと思っただけです。

― 大津波で全てがいつぱんになくなった。

その時に撮った写真を地元でプリントしました。写真屋の86歳のおばあちゃんに「昭和28(1953)年に門司で起きた大水害にそっくりだ。あなたはこの水害で犠牲になった1人で、生まれ変わったって震災を見る使命があつたんだ」と。見えない縁があるのなと感じました。

お金よりも大切なものがあり、それは目には見えない。そのことを伝え、防災教育にも貢献しよう、今、阪神淡路大震災の被災者が立ち上げた、楽しみながら行う次世代型の防災訓練の事業を九州で展開しています。この活動をぜひ大槌町でもやりたいです。

(取材/2018年6月)